

863  
166

はなふき



国立国会図書館 タイトル『はなふき』 請求記号 863-166

ガラス使用



夫精女君遠祖巧作似儂  
 似能之是精之味累之古風  
 考傳于世也久矣然諸是隱顯  
 出沒者是浮世之態矣也中古  
 古今集只似能歌中世玉薰竈  
 而似道途舍顯矣今也柔世左  
 祖似能胞唱費句考





皇是亦安之瓊澤也。落有素磬  
者。身多之。高家也。業外子。借籍  
不。利。能。未。至。不。惑。道。号。福。奇  
能。勺。尤。巧。也。姑。恒。恤。少。御。通。生  
考。岩。梅。獨。吟。不。句。人。所。美。称。也  
當。幸。已。春。好。病。十。余。日。而。没。歲  
六。十。四。可。惜。矣。敬。齋。此。稿。并。志。

已也。乃。留。業。之。余。力。僅。同。志。著  
歌。仙。且。輯。數。句。而。響。之。焉。也。和  
南。

文政四年己辰三月

敬齋誌





旅棟向山奥行 素檠居士

ちるはれのかたはみり哉

をぬむ禁は望月おきて

戸障子に肉を帰る春も家し

心新のたけり芳しげあり

ほのろきと眼あふき道は遠なる

暑さししりたり又来る

敬齋

敬山

看志

游湖

和風

何ふみしれ蔓も草のあはる里は来

筆をて筆原市はのえるち

醒かき酒のほけお侍を

拙女乃筆をうりて早起

夫もくし愛は長拙の通ひ及

門と歌多ハ呪あはれ大

足籠賣うまはるる月

年ふりもくしあはるる

玉簫

李陽

道考

顧享

敬之

居散

遊雀

簾布



詠ふも交々しき心も言  
細く好けるを月乃茶外  
世の中いふ人の上は世は會  
隣合せは遅き  
后乃已は縁年引手小鈴  
くそ好く後又さ々此鈴  
とらかへかよきまきと雲羽織  
免う泪乃永ししと海

ろ仙  
乙里  
其柳  
和川  
樂只  
豊和  
左網  
尾之女

夜もまのう持物物入るる箱あけ  
奇集りまきさうん  
そあつても道理は津のぬ筋欠  
負まて見れ口もあまき  
河此鈴ハの心此義成漢の妹  
月ハ生筋乃を中まみたる  
那も此義を引まき極つて  
念仏を山にたれ藤相さ

茂地婦  
善和  
其藤  
鵲巢  
散齋  
蔽山  
看志  
游湖





向を乳ても夏は浮きあがり  
旅を伴ふ事して控る。服差  
思ふ事く丈夫の響る者此坂  
むさや喰を色如上え此所  
惜む事し世に春の春あり  
年く残る事なり黄く

和風  
玉簫  
李仰  
道考  
樂中  
執筆

送  
さるる

花のしるしをさるる  
漕舟してさるる  
咲花にさるる  
送人してさるる  
舟のさるる

子文  
草均  
秋拳  
東陽  
梅老

墨水雨中

晴るも花をさるる

護物





えいしむる夢并りし花は中  
ちるん今夢乃ん返りて見えよ  
今やしるふ夢をききせし雨  
雪のしるしや夕ア花のしる  
花は秋の夢の夢をききせし  
折のけし夢をききせし雨  
夢の夢をききせし雨  
夢の夢をききせし雨

雪雄  
菊也  
太良彦  
魚文  
雨考  
夢南  
一肖  
敬齋

散る村の風も美しき雪  
夕月いりし夢をききせし  
ふしやあしむしき夢をききせし

甫雀  
兔國  
何頼

上野

花をみよふ人返ればらり梅の柳  
ちるん今夢乃ん返りて見えよ  
さし何人しるし物なきむし  
ほろろぬ夢をききせし雨

茶静  
鹿太  
太節  
十駕



八重ささく又さし大もつりよ何ま  
ふれもい定むさしちるされり哉  
あつるもや想ひいふむる山梯  
ささく戸やささくいさるふもさる夜  
竹や雀人おちつたれ木の口の形  
八重ささくちるもさるも月の中  
春冴のえるお糸くくり癖

信濃の園小茶枕せし舟

嵐外  
椿堂  
六磨  
卧鵬  
米度  
永木  
敬山

馴と。遠あつに引さるる  
あつちの中解宜紙清中合さる  
よも山に紙さるる傷るをばさ  
そと途移也啼は舞あつん  
とよあつちの中あつち代も問れ魚  
下戸に紙をふ突あつれり  
寸あも何れ海あつ直りも  
小あつちのあつちのあつち

山 木 山 木 山



ゆげさの氣も此里に暮るる  
君ハみよしとあゝ雨乃今  
志望もあつたもあつた月影  
軍に侍もくゝ拓乃あら  
少少平あつたもくゝ娘乃  
きゝうゝあつたもくゝ法  
雇えれ乃志望人よ酒  
起し病よとあつた柳

山、木、山、木、山

心物や車懸たる人乃  
あつたもくゝ大もくゝ春の  
春風や柳ハ帯謀ハく  
春此山登るもあつた雪  
日永しとあつたもくゝ  
志望もあつたもくゝ酒  
雪解の志望もあつたもく

鷹 雀  
晒 我  
葉 山  
松 舟  
蒼 虬  
菊 太良  
馬 頰

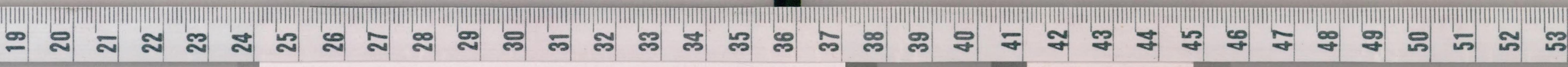




雪の二階小梅もも 子 枕  
 蝶はさかしのくも夜涼き水の上  
 くく鳥のけりさきくそ啼蛙  
 滝却て春也門辺以頬赤花  
 黄きんくしろ白き朝念佛  
 雨後夜や何ぞいぬ寝る猫の恋  
 梅子月夜と静かき 琴の此音  
 春雨はも柳とくそおひらるる  
 布雪  
 北映  
 對翠  
 李長  
 薺齡  
 善和  
 其藤  
 顧享

赤もくも折きて短し山 椿  
 くらくも春雨屋もまつらし  
 草くも伸ねる以咲きみ色代  
 雪もも黄也此涼よくもくそ  
 雪は本之れ好き也此其奥  
 春もも此ももみ也 堂翁  
 雪はもももも初きも柳  
 雪もも愛れ梅もも柳もも  
 寒松  
 梅壽  
 玉光  
 車両  
 散山  
 遊雀  
 三牛  
 茂登婦

五童





世とらんし持しきく小蝶哉  
何事しつる春は月夜哉  
あゝいづこ何そに春は月夜哉  
黄は花の葉を咲し山より好  
蒲の葉や風は吹日波をよし  
水多れ笑しそ花を畑を中  
春風や二夜と進し星の透  
永き日れ想さしとる多れ籠

北山  
星谷  
南子  
石舟  
楚雀  
巴螢  
壺山  
典人

青柳よ少むかふる也是もをれ  
まゝ柳乃しつわかをる春の風  
登りえる石を聲をあそびひたる  
春はあはれ此れ垣も春はいろ  
芽みてんそも春あしは春はあ  
あつらひし花を歌く葉子の那  
伝電は中むき好電茶をそと  
すゝらそ一昨日つぬ春は雨

左網  
豊和  
茅丸  
大常  
晋峰  
東峨  
平齋  
鯨灯





蜂能巢乃何ふ是あへんや哉  
老成りゆん春形は梅やかし甚  
立たるは切月らも空をこ三日の月  
おもひやせらく見えん挿みく  
春は夜の気ま捨ひよ出るをい  
歌一そ編みぬも切まし总火根  
和歌中ハ見しはる春日哉  
豈人此是あゆや春乃月

漫々 玄蛙 文角 葵亭 江川<sup>控女</sup> 應々 菊塢 雨塘

菜花总也田ふも位れあるる  
代原娘よ志し記名は五形指  
お梅也一本もえれハ二本もて  
ま御是月まあさあそえんれり  
帰るもは行しも志しは甚れれ  
は春はあふしは空蝶乃中  
行春しはあふし遠き形は哉  
春はあふしはあふし新しは哉

松乙 亀丸女 尾上女 采丸 魚居 弓雄 ちひろ 塊翁





杜鵑

今宵昨夜の志々杜鵑  
朝露の生るる子規  
其の聲もすし〜  
みよ〜  
志州中の中津茶屋  
遠〜  
梅〜

千丈 若人 孤山 長齋 南井 其翼 正六

杜宇 歩 茅 以 牽 波 之 舟 也  
中 花 鳥 妹 子 也 夜 あり じ 色  
身 到 月 乃 朝 右 八 母 時 也  
加 屋 山 此 葵 乃 け 之 月 也  
蓬 生 也 車 塵 不 々 郭 公  
ふら 葉 した 田 稗 の 鳥 や 子 規  
耳 ぶ ぶ ぶ 町 火 又 月 だ らん  
杜 宇 啼 也 松 花 心 拾 ち け け

蟹守 井眉 真栖 月居 霞宵 久樹 涂涯 蕉雨



郭公あはれをあへ月夜可柳

散齋

こはるの月あし甘き

一茶

卯のまは垣れおるら海と春ん

玉簫

卯子規されと遠くもなかりを

卓池

舟道遙せし

陰見みよの河まよの夏月夜が

周行

あゝ郭乃歩もすしおくしき

散齋

益瓶は移成ふくあるは鳴り

散山

さう呂れしそく新後乃果

十駕

眼よつぬしよまの経ぬ朝朝

齋

逃くあつち相乃あてしと

行

短夜の半月の心端山の形

乙二

みしう夜もほまぬ外は産あふ

幽嘯

村木乃夢買きて飛舟なる

木海



輕軒の近江集巻、意阿の  
杜若今さく意々んくよる  
月嬋子物同豊くく此の那  
をりゆ此日小毛涉る此燭うふ  
又月面や茶井水夢子確古隣  
日くまそし麓きらと啼ゆ執田橋  
山葛おくく繁にうる異のさ哉  
りくよまはらあすもえかんこ香

十丈  
千顚  
梅中  
踐之  
游湖  
音志  
ろ仙  
和風

渡りあげて花をまゆや右左り  
都ちのしらおんそりま此山

唐澤寺より

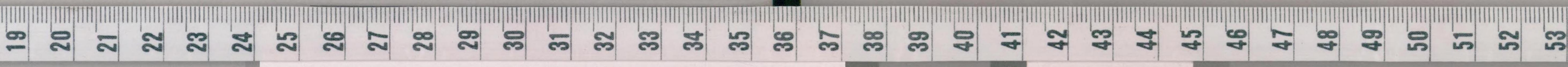
みまよしつしり合せや峰に寺  
洗佛や春におくまてちるふん  
お月面や巧者よ善くも温泉地者  
新写へ出て糸糸付し袷う能  
旅休よ青糸くせん合観の意

樂只  
百蒸  
曾人  
久臧  
文貫  
其翠  
草夫



嬉しきも昔より今も此是の哉 草籠  
 ニッ其そニッ其婦 蟬は聲 万備  
 夕うけくもはもまは蟬の音 葱三  
 何とあくちのそはあもや牡子 吾三  
 佛しめはぬけてはうや夏の音 菩莪  
 湖のまうううまはる 何りさの那 其齡  
 田植しそきさみまの音夜う那 輜外  
 初蟬やむしり啼ても十なりそ 馬梁

押しそきさみまの音夜う那 壺半  
 朝戸出れはらら静るる音哉 青隱  
 山梔子やそりそき月七あは 馬年  
 五月のそきあうれり人まの 桂丸  
 鳥啼て朝さくしらる 更衣 茅丘  
 村雨は是れそきさよ七用干 一之  
 顔夜狐波よほららる芦間哉 石鳴  
 蟬鳴や田中は数ハ歌會不 公行





子能葉よ高坂の魚も 草の如  
 あく魚たもやうに牡丹此落意哉  
 青州又世にふんふん 河を渡る  
 笠て文政かたけ山田此植め哉  
 夕立也 柳も丹け入山此家  
 附とにふんふん 涼しやう治の山  
 蟬あくや門田かたけも朝うら  
 五月もや草葉をさへく 高坂

居散 敬之 道考 李陽 乙里 五雲 宜彦 采翁

魚くふんふん 志たらん 飛巻  
 田丹換し 祝此讓り牡丹吟  
 黄鵠のふんふん 遊入 夢黄をむ  
 枝蛙えそあふん 啼さるし  
 えぬ夜乃 照ふん 杜若  
 明る夜乃 照ふん 杜若  
 いそよ 此乙も 牡丹の 如く  
 昼飯ふん して 久し 果たる

石海 二川 北冥 八朗 乙堂 真阿 照樹 芳汀



あゝをたかむ日毛たし蝶の香  
あけは海を渡るも雲を  
けし散ぬもたふは等知し  
人声や麦とる妹も月夜も  
咽かきき夜や莫きに船り夢  
灯とあけて蚕起すや小月雨  
来る人波かききこや鳴る鶯  
水里や西の戸に花なみ鶯啼

洲香  
百山  
曙堂  
帰来  
了國  
又人  
都丸  
里旧

ほろくくし給ふも自然牡丹哉  
夏の夜や危しよあると此川  
掃うとく後も此は落牡丹

裏梅  
青以  
柳平

加茂

見るよち鳥十度よかゝる競る哉  
見競る隣もあまを 更衣  
苔吟らふ多れさの毛鴨と柳  
麻花子よ扱てかききよ解るあ

奇測  
屋鳥  
三驛  
竺齋



田少女色、田花をばらや地子  
繁河をばらにをばらや地子  
桐のけやを解あしてり道去  
六月色かゝる標り蟹れうへる  
目ふつけふ飛つてやや火の虫  
撫子れ咲出よとを小曲し  
卯花をばら河をばらにをばら文  
ニッニッ咲てんをばら山つし

三津人  
星譜  
虚白  
桐栖  
鵲巢  
其柳  
簾布  
和川

月影り海啼出たを鶴うね  
はしりに蓮花をばら山田哉  
水あふまじ嵐の波や蓮の意  
木うられて花殊勝ある蓮花  
ふさふさ九品花をばら蓮花華  
エッ咲けはなふさる蓮乃花  
華も葉もいとよし蓮花胡索

敬山  
篤老  
水老  
止尼  
正阿  
田年  
樂中





863  
166

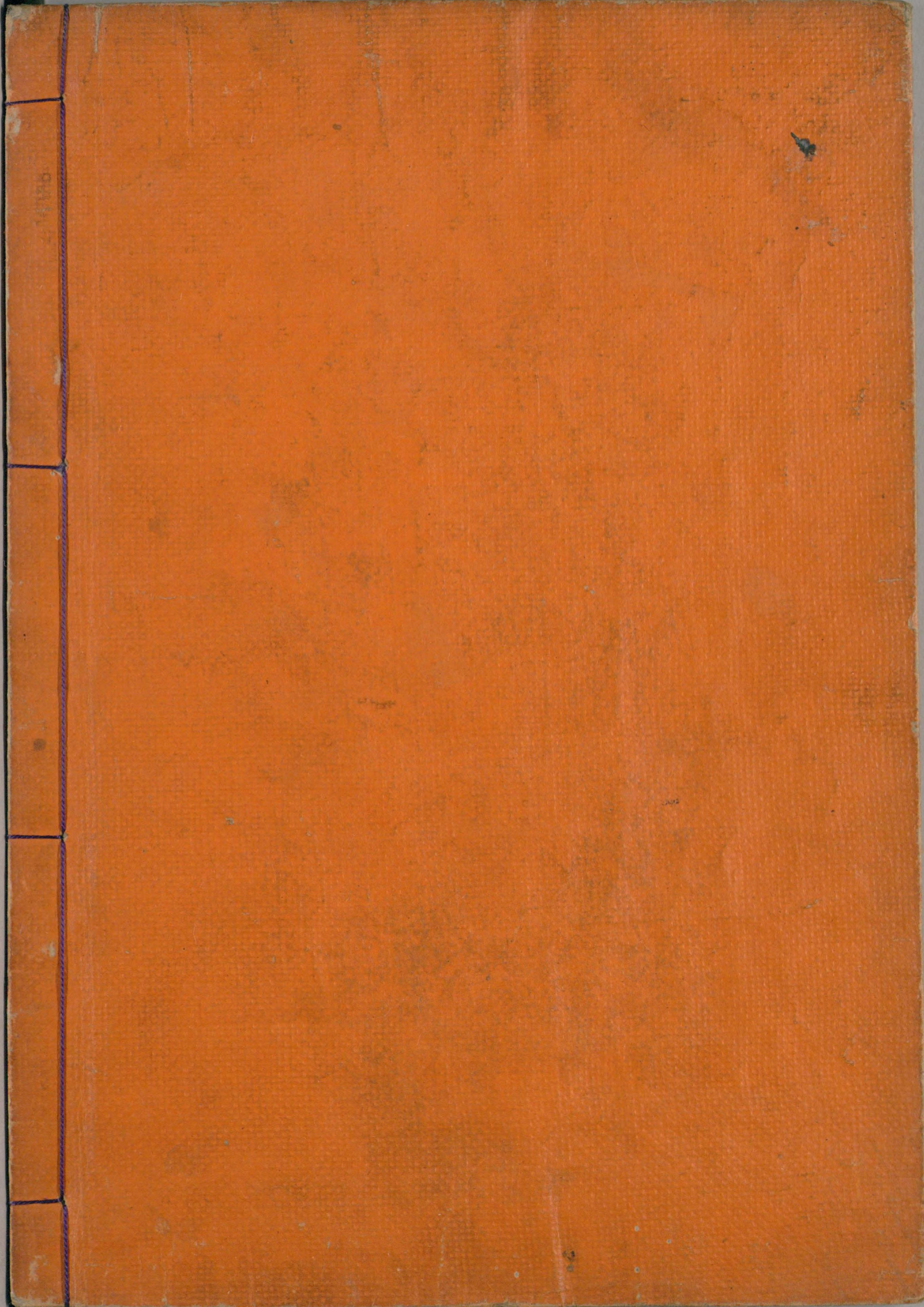
14263

文政四年夏六月稿成

方 謙

敬山  
敬齋  
輯





国立国会図書館 タイトル『はなふゝき』 請求記号 863-166

ガラス使用